

死のじやんけん



井ノ上學

死のじゃんけん

目の前には黒い扉がある。

向こう側には俺とじゃんけんをする相手がいる。お互い、『じゃんけんぽん』という掛け声で扉が上に開かれ、持っている武器で勝敗が決まる。

グーが鉄球、チョキが巨大ハサミ、パーが毒が染み込んだ布きれ。

負ければ鉄球で殴り殺されるか、巨大ハサミで刺し殺されるか、毒が染み込んだ布きれを被され毒殺される。

あいこなら二人とも死ぬ……。

相手も人間。俺も人間。

これほど何を出すか迷うじゃんけんは他にないだろう……。

じゃんけんというゲームは心理戦。

普通に考えれば布きれを顔に被せるのがまだ気が楽だろう……。

ではパーか？

いや、相手も同じ事を考えているなら俺はチョキか？

刺し殺したくない。 血は見たくない。 でも死にたくない……。

相手がパーを出すとは限らない。

俺がパーを出すと読んで相手がチョキなら、俺はグーか？

殴り殺したくない。

でも死にたくない……。

こんな恐怖感と緊張感が混ざり合ったじゃんけんは嫌だ。

究極の三択だ。

何を出せばいいのかわからなくなった。

よしっ、パーだっ！

これでいこう。余計な事は考えるな。

俺は目を閉じて震える手で布きれを持った。

「じゃんけんぽん」

扉が開く音がした。

俺はまだ目を開けていない。

「ん？ 妙に静かだ……勝ったのか？」

目の前には黒い扉がある。

向こう側には、私とじゃんけんをする相手がいる。お互い、『じゃんけんぽん』という掛け声で扉が上に開かれ、持っている武器で勝敗が決まる。

グーが鉄球、チョキが巨大ハサミ、パーが毒を染み込ませた布切れ。

負ければ鉄球で殴り殺されるか、巨大ハサミで刺し殺されるか、毒が染み込んだ布切れを被され、毒殺される。

あいこなら二人とも死ぬ……。

普通に考えれば、これほど何を出すか迷うじゃんけんは他にないだろう。布切れを顔に被せる方が、まだいいだろう……と相手は思っているはずだ。

死にたくない、血はみたくないと悩みながら、恐怖感と緊張感が混ざり合った心境で、何を出すのか考え込んでいるのだろう……。

人間は独りになると、とても弱い生き物になっていく。

集団になると、人間は人間ではなくなっていく。

結局は自分の事しか考えていないのだ。

こういう状況なら、尚更だ。

自分の中で恐怖というものを勝手に作りだして怯えている。目の前には存在しないものを見て動こうともせず、もがき苦しんでいる。

実際、恐怖というのは存在しないのに……。

人間という生き物は本当に哀れだな。私が負ける、というより死ぬことはない。

私は何も持たずに扉の前に立った。

「じゃんけんぽん」

黒い扉が上に開いた。

相手は、やはり布切れを持って恐怖で目を閉じている。

哀れだな……。

私は静かに、そっと巨大ハサミを手を取った。

相手は人間……私は人間ではない……。

グサッ

完